オリエンテーリング
道場 第 61 回

2010 年世界選手権を振り返る

松澤俊行

13 年ぶりに「あの国」での開催となった今年の世界選手権。日本人には対応が難しい、と言われたスカンジナビア半島のテレインでの代表勢の闘いぶりは。

世界選手権ミドル予選を走る松澤俊行

舞台はノルウェーの森

2005 年の日本、2006 年のデンマーク、2007 年のウクライナ、2008 年のチェコ、2009 年のハンガリーと、近年の世界選手権は、日本選手にとってテレインへの対応はさほど難しくない、と言われた国での開催が続きました。もちろん、詳細に見ればこの５回の内にも難しいテレインで行われたレースもありましたが、最初から最後まで手も足も出ないまま終わる選手は、初出場の若手選手の中にもいませんでした。

一方、90 年代以降に行われた北欧三国（スウェーデン、フィンランド、ノルウェーの三ヶ国）の世界選手権では日本選手の大苦戦が目立ちました。北欧へ月単位の滞在をした経験がある強化選手、世界選手権以外の国際大会に出場するために海外遠征する選手も一時期に比べれば減っています。

「次の世界選手権は相当厳しい闘いとなるのではないか」。昨年来、日本チームの中でも危機感が充満しており、対策が講じられて来ました。具体的には、

- 吉田勉ヘッドコーチ設定の練習を富士で行い、ノルウェーでの応用を想定しつつ基礎技術を反復（詳細は前号オリエンテーリング道場を参照）
- 6月に代表選手3名が現地（トロンハイム）での合宿に参加、開催地近隣のテレインで練習を実施
- 情報交換のシステムやルールを確立し、競技に役立つ各種の情報をチーム内で効率的に共有

といった取り組みが行われ、テレインへの不安感は少しずつ取り除かれていきました。1998 年に同じトロンハイムで開催された世界大学選手権に出場した選手（柳下大、山口大助、小暮円香の３選手）、1997 年のノルウェーでの世界選手権に出場した選手（加納尚子選手）もメンバーの中にいましたし、チームとして前向きな気持ちで大会期間に突入できたように思われました。

結果の総括

以下、個人戦予選の結果をまとめます。それぞれの選手について、「タイム」「予選組内の順位」「同じ組の１位の選手のタイム」「１位の選手に対するタイムの比」「同じ組の 15 位の選手のタイム」「15 位の選手に対するタイムの比」を記しました。なお、各種目予選は男女 3 組ずつに分かれて行われ、各組上位 15 名ずつ、合計 45 名（男女合計だと 90 名）が決勝進出となります。日本チーム関係者にとっては 1 位とのタイム比以上に順位や15位とのタイム比が気になるところです。

選手同士は当然レース後にお互いの感触がどうだったかを確かめ合います。対策の成果もあって、どの選手も「最初から最後まで手も足も出ないまま終わる」ということはなかった、と内部にいる者には思えました。とはいえ、表にして数字を眺めてみると、やはり「完敗」と評価せざるを得ない数字が並びます。

そんな中、予選通過のボーダーラインから１分半の差での 17 位と、決勝進出に迫った番場選手は「さすが」と言えるでしょう。本人いわく、２年ぶりとなる世界選手権へは万全とはほど遠い状態で臨み、大会前は予選通過に向けての自信を持てなかったとのこと。（詳しくは「バンバ洋子のページ」を参照してください。末尾にＵＲＬを記載しています。）それでも、ロング（2006

2010 年世界選手権個人戦（開催地：ノルウェー）　予選日本選手成績

種目と選手	タイム	順位	１位	１位比	15 位	15 位比
スプリント山口大助	18 分 16 秒	26 位	15 分 01 秒	122%	16 分 33 秒	110%
スプリント加藤弘之	18 分 24 秒	28 位	14 分 57 秒	123%	16 分 30 秒	112%
スプリント朴峠周子	19 分 47 秒	23 位	15 分 34 秒	127%	17 分 43 秒	122%
ロング柳下大	77 分 37 秒	24 位	56 分 16 秒	138%	63 分 37 秒	118%
ロング山口大助	76 分 28 秒	28 位	54 分 48 秒	139%	64 分 48 秒	118%
ミドル番場洋子	34 分 41 秒	17 位	24 分 55 秒	139%	33 分 10 秒	105%
ミドル松澤俊行	31 分 39 秒	28 位	22 分 17 秒	142%	27 分 21 秒	116%
スプリント番場洋子	21 分 17 秒	27 位	14 分 39 秒	145%	17 分 17 秒	123%
スプリント小林遼	22 分 09 秒	31 位	14 分 52 秒	149%	15 分 59 秒	139%
スプリント小暮円香	21 分 45 秒	27 位	14 分 19 秒	152%	16 分 42 秒	130%
ロング朴峠周子	64 分 09 秒	22 位	40 分 46 秒	157%	55 分 54 秒	115%
ロング寺垣内航	89 分 20 秒	30 位	55 分 09 秒	162%	63 分 37 秒	140%
ミドル寺垣内航	39 分 14 秒	32 位	22 分 31 秒	174%	27 分 25 秒	143%
ロング小暮円香	83 分 48 秒	23 位	43 分 40 秒	192%	59 分 27 秒	141%
ミドル関谷麻里絵	53 分 24 秒	28 位	25 分 18 秒	211%	33 分 32 秒	159%
ミドル加納尚子	54 分 28 秒	26 位	24 分 45 秒	220%	33 分 36 秒	162%
ミドル加藤弘之	（失格）					

年)、ミドル(2006年)、スプリント(2008年）全種目において現時点での日本人最後の世界選手権決勝進出者の貫禄を見せた格好です。

ミドル予選を走る番場洋子

番場選手以外の選手も全力は尽くし、それぞれ持ち味を発揮した局面もありました。しかし、1つの大きなミスで後退したり、大きなミスは回避しながらもスピード負けしたりで、全体的に完成度がもう一つ足りなかったとの印象が残ります。

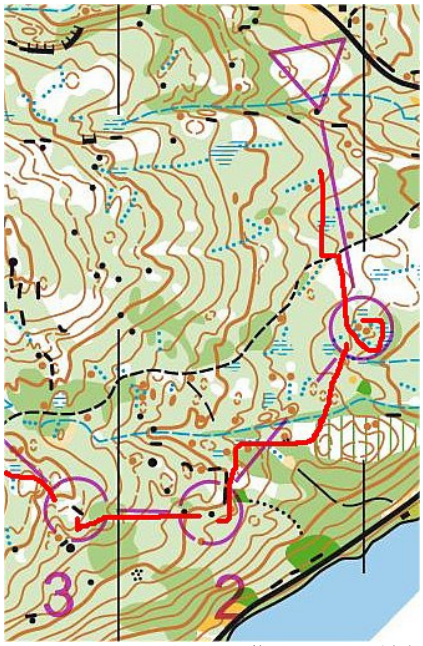
「テレインへの不安感を取り除く」だけでは不充分、と痛感しました。国際大会のレベルで成果を得たければ、対応への不安は払拭して当然で、テレインにも競争相手にも勝てるとの「自信」を得て、さらに（どこかで聞いたような言い回しをすれば）それが「確信」に変わるぐらいでなければ難しい、ということでしょう。

「緑」に苦しむ

ミドル予選序盤は全体が地図上の緑（現地では樹木が密生した見通しが利かない林）で展開するレッグが続きました。精度の高い直進で、数が限られる、小さな、しかし明瞭な特徴物をつなぐオリエンテーリングが求められました。

見通しは利かないのですから、コンパスを使って力強く直進して行くしかありません。理屈は単純明快ですが、実行は難しい課題です。

その課題に対しても何とか対応し、1番２番と、アタックポイントまではかなり良いナヴィゲーションができていました。ところが、アタックポイント後の読図と現地への目配りが甘く、ミスをして１番では１分の、２番では10秒のロス。リズムをつかみ損ねました。２つともオーバーランかそれに近いミスで、足の回転を緩めず決めに行った点、コントロールの奥の様子から冷静にリロケートした点は自分なりに評価できるとはいえ、もう一段階高い精度が必要でした。



世界選手権ミドル予選前半
松澤の走ったルート

今回の世界選手権では全ての決勝進出者とミドルの予選に出た女子選手、ロングの予選に出た男子選手がＧＰＳを装着して出走しています。その選手たちのルートはＷＥＢで公開され、即時確認できました。コントロールの近くを通りながら、そこから長い迷走に入る選手も見受けられました。もちろん日本人選手も迷走をしています。

宿舎で自らルートを確認した選手からは、「コントロールの近くにいた。勿体ない」「惜しい」という声も聞かれました。その気持ちも分からないではありませんが、「本当に近くにいると分かっている」時は、しつこく周囲を眺め回すし、木の裏側の死角にフラッグが隠れている可能性もしっかり考慮するはずです。「この辺じゃないのかもしれない」という疑いが入り込む余地があったからこそ迷走を始めてしまったわけで、実は勿体なくも惜しくもなかったとも言えます。可能性を感じ、信じるのも良いことですが、シビアな自己評価も忘れてはなりません。実際、ＧＰＳデータで決勝出走者のナヴィゲーションの精度の高さを見せ付けられると、「オリエンテーリングは『コントロールに近付けば良い』というスポーツではない」と思い知らされます。

ロング予選を走る朴峠周子

石の段差に苦しむ

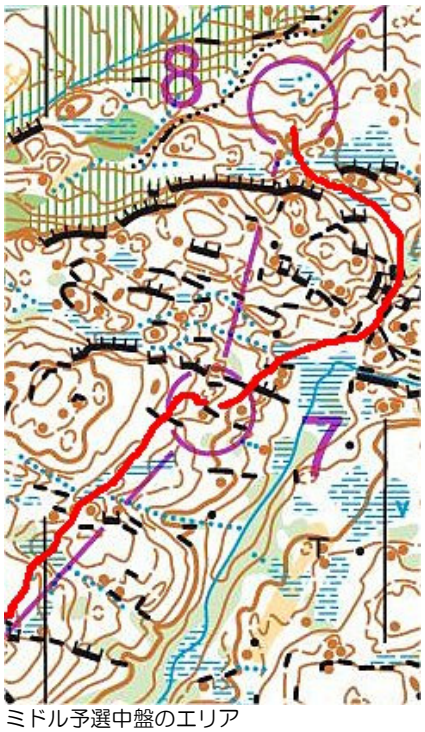
トロンハイムのテレインには、北欧らしく岩がちの切り立った地形が随所に見られ、大小の岩崖に加え、岩崖とは描かれない段差も数多くありました。岩崖や段差が多い斜面を横切りつつ速く正確な方向付けをするには、高いレベルの体力と技術が要求されます。

コントロールは当然のように進行方向の裏手に置かれますから、それこそ近くに行くだけでは駄目で、精密なアタックをしなければなりません。そのためには「アタックポイントへの正確なアタック」も必要です。もちろん、速く走った上で、です。難しいサーキットでレーシングカーを運転するように、アクセルを踏むべきところは踏みつつ、ギアチェンジとハンドリングを適切にこなした先に好タイムが待っています。スリリングな、それだけに「これぞオリエンテーリング」と感じられ

る課題と言えるでしょう。コースの要求するリズムにぴたりはまった時にはえもいわれぬ快感を覚える反面、アクセルを踏むタイミングやブレーキングポイントを間違えると「大事故」に見舞われます。

ミドル予選の中盤はまさにそんなレッグが続きました。自分自身のオリエンテーリングを振り返ってみると、ブレーキを踏むタイミングが少し遅れ、膨らみ気味のラインを走ることとなり、もう一度余計にブレーキを強く踏まなければならず、事故は何とか避けつつもタイムロスを蓄積していったような内容でした。ある程度の積極性としぶとさを見せつつも、上位者はもちろん、予選通過ボーダーラインとも大きく差を付けられました。

日本チームの選手たちは、直前合宿では湿地を拠り所としたナヴィゲーションを反復し、自信をつかんでいました。しかし結果を見るにつけ、それ以外の課題への対応はまだまだ追い付いていなかったとの感が強くなります。筆者ももちろん例外ではありませんでしたし、反省しきりです。



ミドル予選中盤のエリア
細かな特徴物が数多く存在する。レッグ全体を単純化して進むこと、レッグ終盤は最大限精密にアタックすることが求められる。

フランスへ

個人戦の結果を受けての会話の中で「北欧のテレインだから差が広がった、というのは言い訳に過ぎない」と悔しさを前面に押し出し、「チーム全体としてもっと悔しがる空気が必要なのでは」と発言していた選手もいました。このような気概を持つ選手の存在は、終戦ムードに支配されそうになるチームの居住まいを正し、リレーに向けて気を引き締め直す上でプラスになっていたと感じます。リレーを走った選手たちは、警戒心と闘争心を新たにしてレースに臨み、持っている力を再度ノルウェーのテレインにぶつけたことが分かりました。残念ながら結果は個人戦に続いて厳しい数字（女子 27 位、男子 29 位）でしたが…。

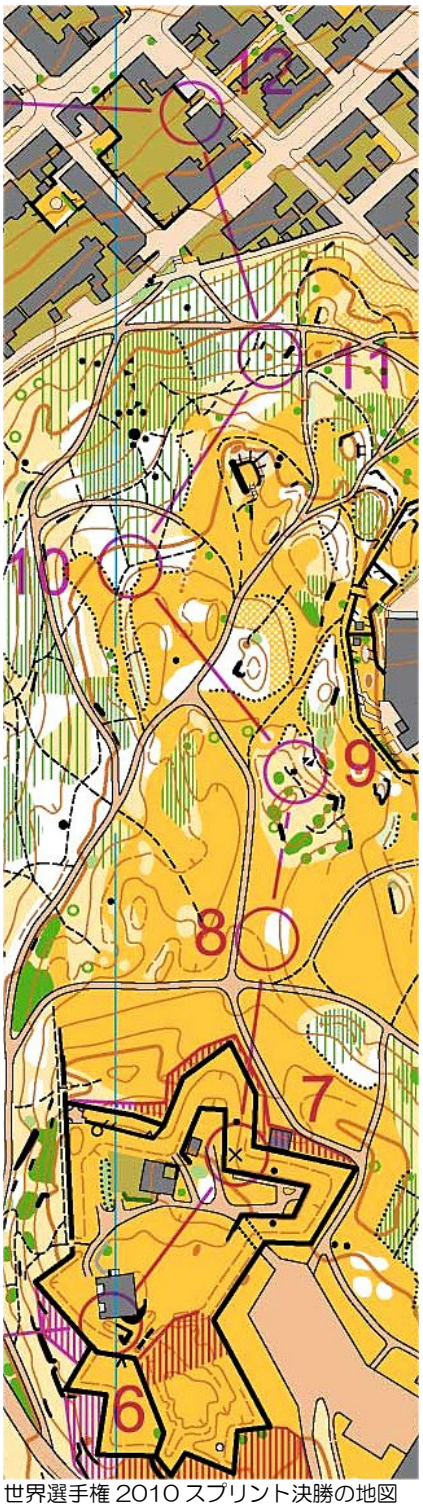
現時点での力は及んでいなくても、当事者たちは闘いを諦めたわけではありません。ベテラン選手として、また強化委員の１人として、こうした空気を外部にもうまく伝えて行き、チームを、そして日本のオリエンテーリング界を良い方向に導くエネルギーとしたい、と考えています。この記事もそのような考えを反映させて記しました。文面を読んで、現場に渦巻く熱い気持ちを感じ取ってくださる方、そして行動を起こしてくださる方（つまりはチームの活動をサポートしてくださる方）が少しでもいらっしゃれば嬉しい限りです。

来年の開催地はフランス。厳しい闘いが続くことは必至ですが、どのような変化が、進歩が見られるか、引き続き日本チームの活動にご注目ください。注目だけで飽き足らない方は、是非とも活動にご参加を…。

リレーを走る加藤弘之

※参考：バンバ洋子のページ
「WOC2010 振り返り」
http://www.geocities.jp/yoko_bamba/orienteering/WOC2010/Summary2010.htm

＜松澤俊行プロフィール＞
1972 年静岡県生まれ。競技者として、指導者として各地で活躍中。主宰する「松塾」の活動は、玄人筋から高い評価を受けている。
「松塾」等、松澤俊行の活動に関するお問い合わせは mazzawa<at>aol.com まで。



世界選手権 2010 スプリント決勝の地図
2011 年フランスではこの舞台にあがる日本選手が見たい。